Magazine for Industrial Design

Design News

Japan Industrial Design Promotion Organization



特集：鉄道車両のインダストリアル・デザイン

219

【CLOSE UP】

常夏のイメージのあるオーストラリアもすっかり冬支度．とうとうスキーのできる季節となってしまった．とはいえ、スキー場は車で5時間とはるか彼方．娯楽の少ないシドニーの冬の幕明けとなる．

娯楽も少ないが、仕事も少ない．デザイナー達は仕方がないので、自分の好きなものをデザインしてみたりする．ついでに暇にまかせてモデルを作る．作ってみたら結構よかったりして、どうせなら自分で売ってみようということになる．これが本当の理由かどうかは定かでないが、シドニーの若いデザイナーの多くは自分で作ったプロダクトを自分の手で流通させることをごく当たり前な方法の一つと考えている．

カーバン＆プレアーのステイショナリーはそういったスタイルの先駆け的存在である．設立は4年前．兄弟親戚同志のファミリービジネスで、国内のみならず、日本を始め、アメリカ、ニュージーランドにも進出、順調にシェアを広げつつある．4人のパートナーのうち、純粋なデザイナーは1人、他の3人は、マーケティング、企画、製造管理と、比較的きちんと仕事が分かれている．おかげで営業活動のためにデザインの時間が削られてしまうといったような事態とは無縁に活動している．リサイクルペーパーの使用、アボリジニ・アーティストとのコラボレーション等の活動姿勢は、デザインにおいてのみならず、これからオーストラリアが取り組まなければならない事柄としても非常に象徴的である．

「シンクプロダクトデザイン」として昨年独立したばかりのポール コーヘンは、ホテル向けのキュートな使い捨て髭そりを発表した．この時期に使い捨て？　一瞬考えこんでしまったが、どの道、ホテルはひどいデザインの使い捨て髭そりを置きつづけるのである．かっこいいに越したことはない．彼のデザインは替え刃が収納できるようになっていて、長期の使用にも耐えることができる．使い捨ての市場に参入することのできる、使い捨てられない髭剃りといったところ．個人のデザイナーが割合簡単に環境問題に取り組める新しい切り口としても評価できるのではないだろうか．

最後は若手、24歳のアレックス ボロの靴べら．彼の場合は、流通まですべて自分で行っているというわけではないが、プロトタイプ、金型の製作および、最産品の製作管理までは自分でこなしている．他の作品のいくつかはスタルクの影響を受けまくっていたりするものの、この靴べらに関してはオリジナリティの高い、美しい仕上がりといえる．シドニー工科大学のデザイン学科を卒業して以来、企業に勤めたことのないという彼は、デザインの仕事だけで食べていけないときは、あらゆる職種をこなすフリーターとなる．"大変だけどデザインの仕事においては自分の納得できるものだけを作って行きたい．" というのが彼の持論．そんなのは理想論、現実はそう甘くないといって笑うのは簡単だが、彼はこの姿勢でここ数年を乗り越えてきているのである．

アレックスなどの若いデザイナーの作品の流通をサポートしている「アーク・オーストラリアンデザイン」を始め、デザイナーの持ち込みの作品を直接交渉でおいてくれる「リモ」や「ビブレ」といった雑貨店（ちょうどアクシスビルの「リビングモチーフ」のような）がシドニーには存在している．また、ポールの事務所がそうであるように、デザイン事務所の共有は珍しくなく、若手デザイナーの経費負担軽減とデザイン環境の向上に非常に役立っている．不況による環境の厳しさや、国産デザインに対する冷ややかな態度が、若いデザイナーとそれをサポートする人々の結束を強め、自らの力で環境を整えるという行動を起こさせた．

電話の前で座っていれば、仕事の依頼が舞いこんでくるという幸せな状況をほとんど経験したことのないオーストラリアのデザインシーン．しかし、ここには若いチャレンジ精神に支えられた新しい可能性が存在している．

Australian Design Report — それゆけカンガルー!

カンガルー達の冬

待っていても仕事はこない!—受注型デザインからの転換

酒井俊彦



❶靴べら（D＝アレックス・ボロ）
❷使い捨て髭そり（D＝ポール・コーヘン）
❸ステイショナリー
（D＝カーバン＆プレアー）



